

守る。

自然いま 未来

冬でも二〇度を下回る
ことのない阿嘉島の海。
漁港に浮かぶ何の変哲も
ない四枚のいかだで、サ
ンゴにまつわる世界最先
端の研究が続いている。
いかにからロープでつ
るしたかごの中に入っ
ているのは、卵から成長し
た稚サンゴが付着した基
盤と、巻貝のタカセガイ
イが数十匹。タカセガイ
はサンゴを覆い成長を妨
げる藻類を食べる。かご
の網の目は小さく、魚は
入れないため、食べられ
る心配がない。

卵からの養殖研究

22

貝の助けて卵から稚サ
ンゴを養殖しようという
阿嘉島臨海研究所(大森
信所長)の試みだ。
稚サンゴは十月月で四
ヶ月後の樹木状に成長
し、海中に移植できる。将
来的には、オニヒトデの
被害などで荒廃している
海にさんご礁を回復させ
る可能性を秘めている。

■ 私財で運営される国内
でも数少ない民間研究
所。三人の研究者が常駐
し、外部の研究者や企業
関係者も利用でき、そこ
で新たな成果が蓄積され
る。人口約三百四十人の
島にとっては存在感は際
立っている。

■ 谷口洋基研究員(三も
は、ダイビング協会のア
ドバイサーを務め、事業
者に調査方法や保全策を
アドバイスする。サンゴ
の学習に取り組む阿嘉幼
小中学校の小学校にも指
導に出向く。研究所の調
査内容や島の自然をつづ

世界・地域に情報発信

第6部 サンゴの里海 @慶良間



漁港に浮かぶいかだで、先端をいくサンゴ養殖の研究が続いている＝座間味村阿嘉島

■ 科学者だけでなく、地
域との触れ合いも重要な
研究所の役割だ。

■ 谷口洋基研究員(三も
は、ダイビング協会のア
ドバイサーを務め、事業
者に調査方法や保全策を
アドバイスする。サンゴ
の学習に取り組む阿嘉幼
小中学校の小学校にも指
導に出向く。研究所の調
査内容や島の自然をつづ

さんご礁がフィールド
だ。「すぐ近くに現場が
ある。健全なさんご礁が
残っているのが強みで
す」と研究員の田村實研
究員(三)は言う。
「島で生活するために
サンゴが必要で、サンゴ
が生きるためにわれわ
れの技術を使ってほし
い。それが地元の研究所
の価値です」。研究所に
来て十年を越えた岩尾研
二さん(三)は実感を込め
る。

(社会部・澄川卓也)